読解リテラシーと読書指導 ●第3回●

エレクトロニック・リーディングと読書指導

新潟大学
足立　幸子

1　エレクトロニック・リーディングとは

ＰＩＳＡの二〇〇九年調査では、再び読解リテラシーが中心領域となる。前回と異なることは、今回初めて、エレクトロニック・リーディングの評価（Electronic Reading Assessment：以下ＥＲＡとする）が取り入れられることである。全六六参加国・地域のうち、我が国を含めた二〇の国・地域がこの調査に応じる予定になっている。

エレクトロニック・リーディングとは、インターネットなどの電子的媒体を読むことである。具体的には、ウェブページやＥメールといった媒体を読むことであり、この行為はいまや私たちの日常生活において不可欠なものとなっている。我が国の国語科教育では、違和感のある内容かもしれないが、欧米の読書学会では、電子的媒体を読むことは、マルチリテラシーズ（Multiliteracies）あるいは、ニューリテラシー（New Literacy）というキーワードで研究されてきており、その教育も実際に行われてきている。しかし、これまでには、このような媒体を読む力を国際調査として測定したことはなかった。それは、その調査の開発が難しかったからである。ようやく、調査が実態に追い付いてきたといえよう。

2　アクセスすること

通常の読解リテラシーとＥＲＡはどこがどのように違うのか。結論から言うと、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」といった枠組みに大きな違いはない。しかし、読むときに「アクセスする」ということを「情報の取り出し」に重ねて、重視するようになった。たとえば、ウェブページを読むときのことを考えてみよう。何か読まなければならないことがあったとして、その情報が最初のページ（ホームページ）にあるとは限らない。メニューやリンクなどを手掛かりにして、ここにはこのようなことが書いてありそうだと推測しながら、必要なページを開く。あるいは開いたページに必要なことが載っているかを判断し、もしもなければ、また別のページを開くというのは、私たちが普段行っている読書行動である。あるいは、もっと根本的に、検索エンジンを使って、ページを開くこともあるかもしれない。このような一連の活動をＰＩＳＡの枠組みでは、「アクセスする」と表現している。

アクセスには、次の二つの強調点がある。一つ目は、読むものにアクセスする人間（読者）の主体性を、これまで以上に重視しなければならないということである。読むべきものがあらかじめ提示され、それを受動的に読めばいいというのではない。何を読んだらよいかを、読者が選びとったり探したりしなければならない。二つ目は、テキスト自体が立体的になり、他のテキストとの関連を持ち始めたということである。従来のペーパーのテキストでは、筆者の一貫した主張や作品の中に現れる中心思想（主題）をとらえることが

重要であった。しかし、ハイパーリンクで結ばれた別のところを読んだり、リンクが貼られていなくても、分からないことを検索して読んだり、そのような過程の中で反対意見を主張しているページと合わせて読んだりすることが、行われるのである。つまり、一枚の紙に書かれた文章に比べて、テキストの独立性は低くなるし、筆者の側で読まれる順番をコントロールすることも難しくなるのである。

すなわち、エレクトロニック・リーディングでは、読者が主導権を握り、目的意識を持って読むべき対象にアクセスしていくことが重要である。

3　これからの読書指導

ところで、このようなアクセスを重視した読むことの指導は、我が国では、読解指導ではなく読書指導が引き受けてきた。読みたい本を探したり、目次や索引を使いながら知りたい事柄を調べたり、作者に対しての理解を深めるために同じ作者の異なる作品を読んだりすることを指導するのは、読書指導として行われてきた。しかし、媒体が紙の図書資料だけでなく、電子的媒体に拡大していくとなると、これからの読書はさらに次の三点に気をつけて指導しなければならないと考える。

(1)読む目的を明確にさせたり、選択させたりすること

どのような目的で読むのかを、読者自身が明確に理解したり、読む目的を変えることによって読み方や読むところが変わることを実感させたり、読む目的自体を読者が選択するような指導が必要である。情報を獲得することだけが読むことの目的ではない。純粋に文学を楽しむという目的で、電子的媒体を読む場合もある。そのことを意識化させたり、体験させたりすることが読書指導として必要である。

(2)出典情報に関心を持たせること

図書は、一般的に出版社による商品として販売される。採算がとれるものでなければならないから、編集者は企画をし、著者の表現を吟味し、時間をかけて制作され、校正なども行って世の中に出る。したがって、一定の安定した評価が得られるものであるという質的保証がある。無批判に受け止めるといった受動的な読みであっても、読者が非常に困るという場面におかれることはなかった。しかし、インターネットでは、誰でもどんな内容でも発信することができる。そうすると、それを読む側においては、誰がどんな意図で作成し発信しているものであるか、その出典情報をしっかり把握し、判断しなければならないのである。これは官公庁の出している情報であるとか、これは有名なタレントの人が言っていることだとか、これは一般の人のブログだといったことを把握し、そういったものであるという読む構えを作った上で、読むことが必要なのである。

(3)視聴覚情報を意識的にとらえさせること

電子的媒体では、図書資料に比べて、表現に視覚・聴覚でとらえる情報がふんだんに盛り込まれている。先ほども述べたが、ホームページなどでは、メニューやリンクといったものが、色を変えて、文字を変えて、視覚的に表現されていることが多い。また、音が出たり動画が含まれたりしている場合もある。こういうものを使いこなしていく指導をするべきである。我が国では、視覚・聴覚情報をとらえることは、視聴覚教材の指導、あるいは、メディアリテラシーという形で取り上げられてきたことがあったが、これを読書指導として行うことが重要である。すなわち、視聴覚を手段としてとらえるのではなく、視聴覚情報を読むということはどういうことかを、体験させながら習得させることが必要なのである。

あだち　さちこ　新潟大学教育学部准教授。PISA2009読解リテラシー国際専門委員会委員。読書の指導法、評価の研究を行っている。